

Title	廬隠 日記体の小説が意味するもの
Sub Title	Luin's novels in the from of diary
Author	中本, 百合枝(Nakamoto, Yurie)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1992
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.60, (1992. 3) ,p.338- 358
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	中田美喜教授追悼論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00600001-0338

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

廬隱 日記体の小説が意味するもの

中本百合枝

1 はじめに

五・四時期を中心にして活躍した作家廬隱（1899—1934）は、その短い生涯に女性の苦悩を描く作品を数多く残している。それらの作品を通読してみても先ず注意を引かれるのは、日記、手紙の形式を用いた作品の多いことである。日本文学においては、平安時代から日記文学はひとつの重要な文学ジャンルを形成しており、この伝統は現代にも受け継がれている。だが中国においては日記文学はこれほどの位置を占めない。⁽¹⁾ 当時、日記文学がどのように捉えられていたかについて、郁達夫の文章をみてみることにする。

「散文作品の中で最も便利な表現形式は日記体であり、その次が書簡体である。」（1972年6月「日記文学」

『郁達夫全集第四卷 奇零集』所収 上海北新書局1930年 P113）

「（日記形式は文学作品に真実性を与える。）我々は皆日記をつけた経験があるので、日記にはどんな話でもどんな

幻想でも、またどんな常軌を逸した事でも自由自在に書けるということを知っている。誰もでたらめを書いているのだとは言わないし、作り話だとも言わない。なぜなら日記の目的はもともと自分だけに見せることにあり、苦惱を軽減したり個人的な事柄を忘れるのを防ぐために書くものだからである。

日記にはこういった種々の便利な特徴があるので、小説家が初期の習作の時代に日記形式を用いて書けば、その成功の可能性は他の形式を用いて書くよりも大きい。」(前掲書 P114)

また郁達夫は、「再談日記」(1935年6月)の中では、

「ここ七、八年来日記作者は次第に多くなり単行本や選集も十数冊以上が出版されている。このことから、中国では最近多くの人が日記をつける習慣をもったことが明らかである。」(『達夫日記集』所収 長歌出版社 1976年 P11)

と述べている。これらの文章からも、五・四時期以降日記の出版や日記体、書簡体の小説が多く見られたことが伺われる。だが、それにしても蘆隠の作品中に占める日記体、書簡体小説の割合はいささか奇妙に思われる程に多い。この点については批評家たちも言及しているが、作品が散漫になるなどとして一様にマイナス評価である。⁽²⁾

それではここで、日記体・書簡体小説を挙げてみよう。

1 日記体を用いた小説 (初出年月日)

「麗石の日記」 1923年6月

「父親」 1925年1月

2

書簡体の作品（初出年月日）

- 「藍田的懺悔録」 1927年1月
- 「時代の犠牲者」 1927年2月
- 「曼麗」 1928年1月
- 「帰雁」 1929年
- 「一箇情婦日記」 1933年1月―2月
- 「一封信」 1921年6月
- 「或人の悲哀」 1922年12月
- 「寄一星」 1924年1月
- 「海濱消息」 1925年3月
- 「囁語」 1925年9月
- 「勝利以後」 1925年6月
- 「寄天涯一孤鴻」 1926年10月
- 「靈海潮汐致梅姐」 1926年11月
- 「寄梅窠旧主人」 1926年12月
- 「寄燕北故人」 1927年1月

「風欺雪虐」 1927年4月

「愁情一縷付征鴻」 1927年7月

「雷峰塔下」 1928年1月

「生命的光榮」 1928年1月

「寄波微」 1928年1月

「給我的小鳥們」 1935年11—12月

書簡体の作品はその大部分が一通の手紙によって構成されている。例外として「或人的悲哀」は日付順に並べられた親友宛の九通の手紙と、その手紙の書き手が自殺の前に記した最後の日記から成る。「親愛なるK・Y」で始まるこの九通の手紙は「親愛なるキティ様」で始まる『アンネの日記』を想起させ、日付順に魂の苦悩を吐露しているという点では日記体の作品と共通している。また「海濱消息」「囁語」「寄天涯一孤鴻」「靈海潮汐致梅姐」「寄梅窠旧主人」「愁情一縷付征鴻」「寄波微」は親友石評梅に宛てたきわめて個人的な手紙であり、「寄燕北故人」も、北京にいる何人かの友人に宛てたもので、これらの作品には虚構性はみられない。このほか作品中に手紙と日記を含む作品として、「壯志長埋」「女人的心」「象牙的指輪」があり、手紙を挿入した作品は十八篇にも及ぶ。(日記体・書簡体の作品として挙げたものの中に、それぞれ手紙・日記を含むものもある。)

さて、日記体の小説と書簡体の小説は先に引いた郁達夫の日記論でもそうであったように、しばしば同時に論じられる。それは日記と手紙とが種々の共通点をもっているからに他ならない。先ず一人称で書かれていること、次に日記は

自分に向けて、そして手紙は自分を理解してくれるごく親しい他者（または自分に極めて近い、現実存在するもう一人の自分）に向けて書かれるものであるということが挙げられよう。そしてどちらも文章はさほど吟味されることなく、思いつくままに書かれる場合が多い。盧隠がこの形式を好んで用いたのは、彼女が女であったということとも無縁ではないだろう。なぜならこの二つこそが女性にとって最も近い表現手段だからである。たとえばベアトリス・ディエはその著書『日記論』の中で次のように述べている。

「女たちは早くから日記をつけだした。彼女たちにとって日記とは、公衆との対決を心配することなく、文章修行をするための手段であった。日記については手紙と事情が同じである。つまり長いあいだ多くの女たちにとって、

それは唯一可能な表現手段だったのである。」（ベアトリス・ディエ『日記論』 松籟社 1987年9月21日）⁽³⁾

ベアトリス・ディエの『日記論』は西欧の日記について研究したものである。だが、女性の抑圧は時代と洋の東西を問わず存在する問題である。長い徹底した差別の歴史を荷なって登場した五・四時期の女性作家たちにも、この言及はあてはまる。五・四運動（1919年）は言うまでもなく文学革命運動であり、この時期に文学の主流は文語から口語にとってかわる。一見、ここで男も女も同じ出発点に並んだかに見える。けれども男性作家たちには長い伝統的文学遺産があったが、女性作家たちは「女子の才なきは是れ徳」とする社会のなかで素手で創作に立ち向かわねばならなかった。こういう点からみても盧隠が女性にとって唯一親しい形式である日記体・書簡体多用したのは極めて自然なことと思われる。しかし、他の女性作家たちと比べても、その量の多さは群を抜いている。⁽⁴⁾当時流行していたという、女性に親しみやすい形式であったということだけでは説明できないものが、ここにはありそうである。

廬隱自身も日記をつけていたし、友人邵洵美はその中からいくつかの作品がうまれたと記している。⁽⁵⁾ 小論では書簡体は日記体のなかに含まれる性格を持つものとして、廬隱の作品の中に日記体が多く用いられているのはなぜか、彼女の精神構造と日記はどのような係わりがあるのかということについて考えてみることにする。

2 日記体の小説

次に日記体で書かれた七篇の小説の主題をみてみよう。

「麗石の日記」(1923年)は、日記の前後に友人が顔をのぞかせて一年前に世を去った麗石の早すぎる死を悼む。日記の書き手麗石(女性)は同性の元青と恋をしている。日記は最初から憂鬱な調子で始まっており、この恋愛のゆえを暗示している。やがて元青は従兄弟と婚約し、「同性の恋愛は、結局のところ認められないのです。私はやはり、あなたが早く目覚めることを望みます。」(『廬隱選集』百花文芸出版社 1983年 P57)と言って去っていく。「自殺する勇氣はない」、「神様がはやくお召しくださいさることだけを願う。」という文で日記は終わっている。小説としては稚拙であるが、愛を失った後文字通りに生きる氣力を失って死んでしまう主人公を描くことにより、作者にとって愛がいかに絶対的なものであるかをわれわれに示してくれる。

「父親」(1925年)はある雨の日、暇をもてあました三人の若者が「父親」という日記体の小説を読むという設定になっている。日記の書き手は二十五歳の青年で三歳の時に母を失い、以後は継母の手で育てられる。主人公はこの娼婦上がりの継母を心から嫌悪している。父は妻子を故郷に残して北京で働いていたが、十年前独身と偽って若く美しい資産家の一人娘と結婚する。その間妻子を顧みなかったが、主人公に続いて継母とその子供も上京。突然の正妻の出現

に庶母（父の妾、騙されて結婚した資産家の一人娘）はたいへんな衝撃を受け別居に踏み切る。主人公はこの人を一目見た時から恋におち、迷った末に思いをうちあけてしまう。庶母は打ち続く不幸とこのショックで病気になる、やがて死に至る。主人公は二度と家に帰らない決意をして出てゆく。ここには愛情に恵まれない二人の若者が登場する。孤独で帰るべき所を持たない二人は母と息子という立場が邪魔をして肩を寄せ合うことができない。そして主人公は恋心を打ち明けることによって、つまり相手に一步近づくことによって、結果的にはその人を殺すことになってしまう。この主人公には家庭の愛情から切り離された廬隱の姿を見ることが出来る。父も継母も腹違いの兄弟も、家族は皆軽蔑すべき人間として描かれている。そして生まれて初めて出会った愛の対象を、すぐにその手から取り落としてしまうのである。

「藍田的懺悔録」（1925年）は、ある友人が作者のところへ共通の友である藍田（女性）の日記を持って来て、それを作者が読むという形になっている。日記の書き手藍田は七歳の時に病気で母を亡くし、一年後にやってきた継母に冷淡に扱われる。継母は常に「不吉なけどもめ（不祥の小生物）！」と彼女を罵るが、これは廬隱の母が彼女を罵る時に使った言葉である。「私は家庭が私に冷たくても社会は生きる余地を与えてくれるかもしれないと思った。そこで一生懸命勉強し、十四歳で中学校に進んだ。けれども新しい母はいつも私が勉強するのは余計なことだと考えていた。」（『廬隱選集』P300）これもまた廬隱の少女時代に感じたことであつたろう。自身の実母にそっくりなモデルを継母としていることが注目される。やがて藍田は継母が取り決めた結婚を拒否して北京に行き、大学で勉強する。そして同じように冷酷な継母に育てられた何仁という青年と婚約。だが彼は藍田にお金が無くなるとすぐに裏切って他の女性と結婚してしまう。この衝撃に耐えきれず藍田は寝込んでしまう。そして彼女の命がそう長くはないことが、彼女を見守

る唯一の友人芝姐の最後に付け加えた一文によってわかる。

日記には病気の苦しみ、芝姐以外の友人はすべて去っていったこと、親の押しつける結婚をしてもしなくても女はどのみち不幸であるということが、連綿と綴られている。「麗石的日記」や「父親」でも女性をあまりに低い地位に貶めている社会への批判がみられるが、この作品では特に強烈な批判がなされている。同性である継母は彼女に愛のない結婚を強い、友人たちは婚約者に捨てられた彼女に対して、不実な相手を批判せずに藍田を責め彼女から遠ざかる。被抑圧者である女たちまでが男社会に加担していることをあばきながらも、作者は最後に何仁の妻を登場させ、自分たちは対照的な関係ではあるが実際には二人とも男性の生贄になったのだと語らせる。(前掲書 P306) 当時家庭の抑圧を逃れるために北京へ北京へとやって来た女性たちの一つの典型を作者はここで示している。この小説においても盧隱は母親を亡くした主人公を登場させ、父の愛を失い帰るべき家を失い、婚約者に裏切られ、そして自分は死の床にふせっているという絶望的な状況をつくりあげる。

「時代的犠牲者」(1927年)は作者が秀貞という女教師と知り合いになり、彼女の日記を見せられるという形で日記を挟む。秀貞の夫は彼女を捨てて金持ちの令嬢と結婚しようとする。秀貞はもう一人の犠牲者になろうとしている女性を助けなければと、相手の女性に事の真相を打ち明け、その結婚を阻止する。

「曼麗」(1928年)は作者の所へ久しく会わなかった友人丹芬が曼麗の手紙と日記を持って訪れ、それを作者が読むという形をとってその手紙と日記を紹介する。中国を愛し、国のためにすべてを犠牲にしようとする革命の志に燃える女性曼麗が、革命活動に携わるために故郷を後にする。やがて友人に勧められていた考えもなくある党に入るとそこは口先だけ立派なことを言っても明らかに昇官発財だけを目的にしている人々ばかりで、党の内部は腐敗しきって

おり何の機能も果たしていない。日記はその腐敗ぶりを熱心に描写していくが、日記の書き手曼麗は突然神経衰弱にかかって入院してしまふ。日記の末尾には「病気が良くなったら、私は努力して自分の行くべき道を探し、光明を追求しよう。」(『中国現代作家選集 盧隱』三聯書店・人民文学出版社 1983年 P82)と、比較的明るい姿勢をみせる。盧隱自身は実際に曼麗のような行動を起こしたことはなく、革命活動に赴く友人たちを常に見送る立場であった。そのためかこの作品はやや精彩を欠いている。

「帰雁」(1929年)は日記体で書かれた小説のうち唯一の中編小説である。作者は1921年から小説を発表し始め1934年に死亡するまで書き続けるが、この作品は十四年間にわたる執筆期間のほぼ中間、創作を開始して七年目に書き始めたものである。作者は1922年に北京国立女子高等学校を卒業し、翌23年郭夢良と結婚している。二年後(1925年10月)夫は肺病のため死去、盧隱は一歳に満たない長女を連れて夫の故郷福州にしばらく身を寄せる。1926年夏、郭家での生活にいたたまれず上海に行き、翌年の春には北京にもどってくる。これまで紹介した小説が全て前後に作者が顔をのぞかせ、間に日記を挟むという形をとっている中で、この作品は完全に日記だけで構成されている。日付は三月三日から九月九日までとなっており、その内容からみて1927年の春から秋にかけての盧隱の心情を綴ったものと思われる。⁽⁶⁾この頃の状況について作者はその自伝の中で次のように述べている。

「夫の死の一年余り前に母が亡くなり、夫の死の二年後に親友石評梅の病死、その二・三カ月後に長兄の死と、引き続く不幸のなかで病気になる。」

病に伏せるなかで、私は多くのことを考えた。自分の悲哀の哲学と悲哀の生活は既に限度に達した、今死ぬことができないのであれば、生活面でも作品の上でも転換する必要があると思った。なぜなら私は既にこっちもさっ

ちもゆかないところまで来てしまっているのだから。

病気がよくなって以後、私の第一時期の思想が終わった。「帰雁」を書く頃になると私の思想はすでに変わりつつあり、もう悲しみに支配されたままでいることはできないと深く感じた。世の中には欠陥があるが、その欠陥は人間の力で埋めるのだ。(略) 私がこういった気持ちを持ちさえすれば、私の人生には光が見え力が生まれる。だから「帰雁」のなかで懸命に叫び、懸命に求めた。ただ恨めしいことにあの頃私の頭のなかにはまだ封建時代の余毒が残っていた。私は敢て礼教の打破を声高に叫んだりしなかつたけれども私の心はそうしたい思いで一杯だった。

この二つの矛盾した考えのために苦しみ、遂には旧い考えに負けてしまい、それであの傷ついた帰雁はなおも更に深い悲しみを背負って新たに彷徨っていったのだ。

私の帰雁はこのようになんの实りもなく終わってしまったけれど私はこのころ唯建と出会った。」(『盧隱自伝』P95)

これ以後、「悲哀の海」から抜け出して周囲に目を向けるようになったという。彼女は自分の思想を「悲哀の時期」「転換の時期」「開拓の時期」(前掲書P98)と三つの時期に分け、「帰雁」は「転換の時期」の作品として位置づけている。

「帰雁」の内容は次のようなものである。日記の書き手は夫を亡くしており、五年ぶりで幼少時代を過ごした北京の叔母の家へもどってくる。友人たちは毎夜のように歓迎会を開いてくれるが、その席で「私」はいつも理性を失って泥酔し涙にくれている。そのうちに「私」を慕う年下の青年が現れ、過去を乗り越えて生きてほしいと励まされるが、その愛を受け入れることができない。自分は不幸な人間だから人に与えられるのは悲哀だけだと、相手を求める気持ちを

理性で押えつけ、青年の求愛を拒否し続ける。そしてやがて彼が去っていくと、絶望して煙草や酒や徹夜などの不摂生な生活で緩慢な自殺を試みようとする。この小説は悲哀の作家と称される廬隱の作品のなかでも最も感傷的なものとなっている。作者自身が述べているように前半期の「悲哀の時期」の総決算ともいえる様相を呈している。

「一箇情婦の日記」（1933年）は「帰雁」と同じように日記だけで構成されている。廬隱は1928年に李唯建に出会い1930年に再婚、彼との巡り合いにより廬隱の作風は一変する。この小説は彼女が「悲哀の海」から出たあとに書いたものであり、未婚の女性が妻子ある男性との恋に終止符を打ち、革命戦争に加わって戦おうという決意を描いている。「帰雁」以前の小説とは異なり、希望の感じられる作品である。

3 母親喪失の苦しみ

自伝作家といわれ、友人や恋人を時には実名で、そうでない場合でもはっきりと人物を特定できるような形で繰り返し描写した彼女が、自らの母親について（そして自らの子供についても）ほとんど言及していない。母親がまれに登場する場合にも、二行を費やすだけで終わっている。このことは逆に彼女が母親に強いこだわりを持っていたことを感ぜさせる。彼女の作品中母親についてまとまった描写があるのは、初期の代表作「海濱故人」だけである。この小説の中で廬隱は自分の生い立ちを『自伝』と若干の違いはあるもののほぼ事実通り語っている。

母が読み書きのできない古い女性であったこと、廬隱は彼女にとって初めての女兒であったにもかかわらず、彼女の生まれた日に自分の母が亡くなったため、廬隱を「不吉なけだもの（不祥の小生物）」として嫌い乳も与えず、抱こうとしなかったこと。二歳の時身体中にできものができて一日中泣いている彼女を母は死ぬほど殴ったこと、みかねた乳

母が自分の田舎に連れて帰りたいと言うと母は、死んだら死んだで仕方がないと言って彼女を手放したこと。また父の赴任地に向かう船の中で泣き止まない彼女を、父が本気で海に投げ込もうとしたことも記されている。七歳の頃は文字をおぼえないといっては食事を与えられなかったり鞭で打たれたりしたし、九歳の時には妹に悪い影響を与えるという理由で、貧しい家庭の女子のための全寮制の北京慕貞学院へ入れられる。ここでは初めて口にする貧しい食事が喉を通らず病気がかりしている。彼女はこの時はっきりと自分は捨てられたのだと感じる。またある時には革命軍が来るため一家は天津に逃げるからすぐ戻ってくるように知らせを受け取って帰ってみると、もう皆逃げた後で、置き去りにされたことにたいへんな衝撃を受ける。廬隠はこうして繰り返し繰り返し母親に捨てられ、そしてそれ以後も捨てられ続けるのである。

廬隠は乳幼時期に母とのスキン・シップを欠いており、家族から全く切り離された一時期を持っている。廬隠の言うところによると、母親は兄妹たちの中で、なぜか彼女だけを嫌っているようである。自らの母親の死に打ちのめされた母が、恐らく疝の強い子であつたらう彼女に十分な愛情を注ぐことができず、そしてこの初期の関係がうまくいかなかったことがずっと尾を引いたであろうことは容易に推測できる。⁽⁷⁾

「母はいつも私に対して氷のようにつめたい顔をしており、心から私を憎んでいた。」(九歳の頃 『廬隠自伝』 第一出版社 1934年P15)

といった表現からみても、彼女が否定的な母親コンプレックスをもっていたことは明らかである。廬隠はまた自伝の冒頭でこういう。

「大人になってその幼年時代を思い出す時、過ぎ去った気持ちになつかしく思うものであろう。(略)しかし、私は

例外である。私は自分の幼年時代を思い出すとき、ただ滑稽さを感じ、そして溜め息をつくばかりである。」(『廬隱自伝』P2)

母からうとんじられた結果、兄妹からも、そしていっしょに住むいとこたちからも蔑まれることになる。だが小学校にあがってから成績が良くなり、周りの人々はやっと彼女の人格を認める。そして師範預科に合格。『自伝』「幼年時代」の終りは次の文で結ばれている。

「自身の努力の結果、やっと子供時代の不運を打ち破った。だがこの時私はすでに十二、三歳になっており、貴重な子供時代はもう過去になっていた。二度とこの不愉快な時代を楽しめるものに変える術はない。今でも子供の頃を思うとき、私は悲しみでいっぱいになる。」(『廬隱自伝』P32)

これは再婚で幸せをつかみ二人の娘の母である時に書かれたものである。だが失われた幼年時代に対する思いは強く、決して癒されてはいない。彼女は母を、あるいは母なるものを失い、そして自分自身を失ったのだ。失ったものは、けれども取り返さなければならぬ。その取り返す手段の一つが、廬隱にとっては日記であり、そして創作であったのではないだろうか。

さて我々は日記文学というとすぐ、我が国の平安時代から続く女流日記文学の伝統を思い起こす。多くの女たちの手になる日記が残され、そして多くの研究がなされている。時代や国が違っても、女が日記を書くという行為には何らかの共通性があるのではないかと思われる。今関敏子氏の『中世女流日記文学論考』は、そういう点でとても興味深い。著者は次のように述べている。

「女流日記の出発点は〈喪失〉である。さらにその中の多くは、「愛する者の死」という〈喪失〉感である。そしてこの〈喪失〉故に、日記作者の自己意識は、自己の人生を特殊と捉える自己把握となる。」(『中世女流日記文学論』和泉書店 1987年 P30)

「作品執筆とは、言うまでもなく、異次元の世界構築であり、虚構の世界の創造である。しかし、又、日記作者にとっては、〈喪失〉から回復する救済、さらに死者に対する鎮魂の意味を持ち合わせていよう。この点で作品執筆は、作者にとって絶望から回復への過程であり、孤独な内面の仕事なのである。」(前掲書P31)

日記が自己治癒の側面を持つということについては秋山虔氏の「古代における日記文学の展開」(『国文学』1965年12月号)のなかにも「痛恨の浄化として日記のいとなみがあった。」という言葉がある。またベアトリス・ディエも日記をつけることは、自らに精神分析をほどこすことだと述べている。(『日記論』P160) もっとも、こういったことは、日記をつけた経験のある者なら誰でも分かっていることであるが。

廬隱はその不幸な幼児体験から大きな喪失感をもっており、その意味では彼女もまた絶望からの回復のために作品を書き続けたといつてさしつかえないであろう。七篇の日記体小説はすべて愛情喪失(「曼麗」は希望の喪失)の物語である。そして作品中の主要人物は死んだり、重い病気に苦しんだりしている。「麗石的日記」では、恋人の裏切りに生きる希望を無くしてしまった主人公が病死し、「父親」では主人公の愛した相手が死ぬ。「藍田的懺悔録」の藍田は死の床に就いており、世の中のあらゆる関係から疎外されている。「曼麗」では主人公は革命の夢に破れて神経衰弱で入院中であり、「帰雁」の主人公はといえば、生きる希望を失って緩慢な自殺を試みているばかりである。最後に書かれた「一箇情婦的日記」の主人公だけが前向きに人生を捉えて積極的な生き方をしようとしている。拙論「廬隱の作品にみる社会問

題意識・「五四時期の女流作家廬隱の作品にみえる悲哀の表現」⁽⁸⁾でも述べたが、李唯建と巡り合い再婚して後廬隱の人生観は大きく変わる。この「一箇情婦の日記」だけが悲哀を克服した後の作品である。ユング派の心理学者M・L・フォン・フランツが否定的母親コンプレックスを抱く女性について「母の元型によって『麻痺させられている』このような女性は事実、男性との関係によらなくてはその存在は花ひらきえない」(『メルヘンと女性心理』P51)⁽⁹⁾と述べている。

主人公たちの多くは母を亡くしており、家族の愛情から切り離されている。母親が死んでいない場合でも、苦境に立つ主人公に手をさしのべる家族の姿は見られない。こういったことは当然作者の環境や精神のありようと密接な関係をもってくるはずである。日記体を用いた小説がすべて愛情喪失の物語になっているということは、廬隱にとっても日記という形が自らの悲しみを語るのに都合がよいということであろう。ほとんど自分の日記をそのまま発表したのではなにかと思われるような「帰雁」は、廬隱の作品全体の中で最も悲哀に満ち、廬隱の悲哀の総決算をしたような作品となっているのも興味深い。

- 「私は本当にひ弱で無用の人間だ。」(「帰雁」『廬隱集外集』所収 書目文献出版社 1989年5月 P118)
- 「自分はさいはての孤雁、幸福から見捨てられた失望者だ。長くこの世に留まることを望まない。」(前掲書P156)

「私は不幸せな人間だから人にあげられるものといったら悲しみだけだ。」(前掲書P122)

幼い時にその存在を全面的に肯定されなかった人間は、成長して後も落ち着き所のない不安感を漠然と抱く。ましてやこの時期母、夫、兄、そして唯一人の理解者石評梅とたてつづけに失った廬隱は、幼い娘をかかえて全く孤雁の心境

であったろう。「帰雁」の主人公は青年剣塵の求愛もあくまで拒否して、孤独に固執する。その様子は、幸せをつかむ努力をするよりも今のままのほうがいいと知っているかのようである。このことについて作者は、あの頃はまだ旧社会の余毒が残っていたためだと述べているが、そういった社会的背景によるものだけでなく、彼女が否定的な母親コンプレックスであったことが大きく影響していると思う。フォン・フランツによれば、子供のとき母の愛を十分注がれなかった患者の基本的問題の一つは実存の不安だという。(『メルヘンと女性心理』P211)

「すなわち子どもたちは母親のひそかな邪悪な考えによって、それと知らずに存在の根本を掘りくずされて、その性特有の自己確認についての確信を失う。そして女性としての自発性が眠りこんでしまう。」(前掲書P49)

それによって自分は結婚できないといった自己否定的な考えをもってしまふのだという。慮隠は愛を強く求めているが、自分は幸せになってはいけないのだという気持ちを何処かにもっている。

「苦しい運命は美しい詩だ。その詩から抜け出して平凡な散文になることを望まない。」(「帰雁」『慮隠集外集』P230)

こうやっていろいろ理由をつけながら、彼女は真に生きることから逃避しようとしているのだ。

ベアトリス・デイディエは『日記論』の第二部「精神分析的アプローチ」の中で、日記が作者にとって母胎的避難所となっていることを証明する。

「日記作者のいささか無定形なエクリチュールは、次の二重の義務にこたえる。すなわち作品をつくらず、成年に達しないでいること。だがそれにもかかわらず書き、日記を避難所や鏡として使い、出生以前の生もしくは生の初

めの数年間の状態である幸福と無責任と統一性と安全の状態を、日記のなかで回復すること、である。」（『日記論』P143）

「日記は孤独が綴られる場であるが、孤独は欠落ではなく避難所のように感じられる。」（前掲書P110）

「日記をつけること、それはしたがって平安と内面性の隠れ家を再び発掘すること、『内部』の失われた楽園を回復する事である。日記は安心感を与えてくれる場所であり、自分以外の世界、空虚、いつおそってくるかもしれないめまい、そして未知と分散への墜落に対する避難所なのだ。」（前掲書P113）

ともいう。こういった文章は盧隠が悲哀に固執し、悲哀を賛美し、悲哀のなかに逃げ込むことによってやっと生きていた一時期を想起させる。

また、ベアトリス・ディディエは日記作者が早い時期に母親を亡くしていること（前掲書P114）、同時代の作家たちよりも身体が弱かったことなど、興味深い指摘をしている。盧隠の母が実際に亡くなったのは彼女が二十四歳の時であるが、先に述べたとおり、彼女は何度も母親を喪失している。病気については、盧隠自身、身体が弱かったようであるし、作中の人物の多くが、病んでいる。

以上、盧隠の否定的な母親コンプレックスと日記が持つ意味について考えてみた。日記体小説のテーマが喪失であり、生まれおちてから母を失い、そして世界を失った作者が「帰雁」で言いたかったのは、失うことへの恐怖だったかもしれない。満たされることがない者は満たされることを恐れ、これ以上失うことを恐れる。

先に述べたように盧隱自身日記作者であった。そして作品中の主人公の多くが日記をつけていることから見ても、彼女の生活の中で日記の占める位置は大きかったと思われる。このように日記にこだわり続けてきたことと母親喪失の苦しみとは極めて密接な関係があると思われる。母親から愛されないということは、とりもなおさず世界の喪失につながる。自分の存在価値がない、存在を許される場所がないという苦しみは、何らかの形で補われねばならない。その手段として日記があり、そして小説があった。一人称で書ける日記（あるいは手紙）は、自分の苦しみを訴えるのに最も都合のよい形式である。客観的なまとまりのある作品を作り上げるよりも、彼女はまず生の感情を訴えたかった。「わたしは悲しい」「わたしは苦しい」と言いたかったのだ。日記や手紙は、最も生の感情に近い。つまり女性の内面を表出しやすい形式である。デイディエは、

「女性の日記が男性の日記にくらべてより真率であるかどうかはともかく、一般に、書き直しや推敲の度合いは少ない。この時代（1700年代）の女性の文章には叫び声を文字にしたというおもむきがある。より「自然な」存在とみなされている女性は、素朴な言語を回復しなければならぬのである。」（『日記論』P48）

と述べている。先駆的存在である盧隱にもこのことはあてはまるであろう。

デイディエはまた、日記が詩や小説が作りあげられる準備の場所になっている（前掲書P244）と指摘している。

盧隱の日記の中からいくつかの小説が生まれていることは既に述べたが、特に初期の短編については、作品自体が日記の代わりをしているといった観がある。これは盧隱の創作方法とも関係があらう。『自伝』の中で「私が創作する時の習慣」〔『盧隱自伝』P122〕と題して、次のように記述している。

「私は文章を書くとき、清書をするのが一番嫌いで、長編を書くときでも短編を書くときでも、下原稿を作ったことがない。短編を書くときは、まず構成を考えて筆をとるとそのまま最後まで書く。長編を書くときも、構想を考えそれに概要をつくる。例えば十章書こうとするなら、十章の題目を書き、その後一章づつ書き進め、全部終わったらもう一度見て誤字を正しすべて終わりとする。」

また教師をしながら小説を書いていたので、自分の書いた文章の大半はその暇をぬすんで書いたものであり、生徒に作文を書かせている時、教壇で書いたりした。二時間の授業で二千字から四千字書くことができた、時間が許す時は朝八時から夜の十二時まで書き続けて短編を仕上げたこともある、という。こういった創作法自体、きわめて日記的ではないだろうか。だから、彼女の文章はあまりに素直で練り上げた感じがしない。特に日記体・書簡体のものはその傾向が強く、総じて幼稚な印象をあたえる。

廬隠は恐らく意識していなかったであろうが、否定的母親コンプレックスを克服するために小説を書き始めた。芸術創作のエネルギーがしばしば欠落感をおぎなうために使われるように。だから前半期の小説に日記体・書簡体が多く用いられる。この形式は彼女にとって、苦悩を吐き出す日記そのものであった。だから日記体小説の頂点になる「帰雁」は彼女の全作品の中で最も悲哀に満ちたものになっており、この頃巡り合った李唯建との恋愛により徐々に癒されていくと、もう彼女はこの形式を用いなくなるのである。

注

(1) 中国の日記文学に言及した論文に、玉井幸助著『日記文学概説』所収「支那の日記」(国書刊行会 1982年2月 1945

年に刊行)がある。

- (2) 賀玉波は「蘆隱女士及其作品」(『當代中国女作家論』黃人影編 光華書局 1933年)の中で蘆隱の特徴の一つとして「書簡体と日記体を用いて小説を書くことを好む、また作品中に手紙や日記を入れることを好む」(P242)という点を挙げている。そして日記体・書簡体小説は構成面での問題は免れることができるが、作品は散漫になり読者に単調さを感じさせること、「小説にはさんだ手紙や日記が多すぎるのは読者を最も混乱させるものであり、同時に描写の効果をも損なう」(P244)ことを指摘している。また閻純徳もこの点について、「彼女は多くの小説に日記と手紙の形式を用いている。こうすれば言葉の面でも生き生きして自然であるが、構成の面ではややもすれば散漫になるという欠点が出てくる。」(『中国現代女作家』閻純徳主編 黒龍江人民出版社 1983年 P279)と述べている。
- (3) (Beatrix Didier, *Le Journal Intime*, Presses Universitaires de France, 1976) 西川長夫・後平隆共訳 著者はパリ第八大学の教授で、フランス18、19世紀文学の幅広い研究によって知られる。『日記論』の中で分析の対象とされているのは出版された日記であり、日記体の小説ではない。
- (4) 謝冰心・謝冰瑩らも書簡体、日記体の作品を残しているが、蘆隱のように作品中に占める割合が多いのは、石評梅ひとりである。
- (5) 「彼女の文章の中に容易に彼女自身を探し出すことができる。「玫瑰的刺」はもちろん事実を書いたものだし、「雲羅姑娘」「樹蔭下」もほとんど彼女の日記の中から発展してきたものである。(略)彼女は主観的な筆遣いが好きであるために多くの文章が日記の体裁を用いたものとなっているのかもしれない。人はほとんど彼女が一日も欠かさず日記をつけていると思っいるにちがいない。」(『蘆隱自伝』序文「蘆隱的故事」 第一出版社 1934年初版 P4)
- (6) ここには、親友石評梅の死についての記述がある。彼女が病死したのは1928年9月30日だから、全くの事実の通りというわけではない。
- (7) 『楽園願望』(マリーリオ・ヤコービ著 松代洋一訳 紀伊国屋書店 1988年11月)「早期幼児期の『地獄』としての原関係障害」参照 他にE・ノイマン、スピッツ、ボウルビー等の研究がある。
- (8) 「蘆隱の作品にみる社会問題意識」(『藝文研究』慶應義塾大学藝文学会 1985年第47号)、「五四時期の女流作家蘆隱の作品にみえる悲哀の表現」(『國學院雑誌』八七巻七号 一九八六年七月)

(9)

『メルヘンと女性心理』
88年8月第7刷

(M・L・フォン・フランツ著

秋山さと子・野村美紀子訳

海鳴社

1975年一月第一刷

19